

2015年 IACS 国際学会参加旅行記

秦 勤

日本文化学専門 博士後期課程2年

8月5日-7日にインドネシアのスラバヤ市で行われた IACS (Inter-Asia Cultural Studies Society) 国際学会に参加してきた。「スラバヤ」という名前はインドネシア語で鯨を意味するスラと鰐を意味するバヤがこの地で最強の動物を争ったという神話に由来し、市章に表されている。天然の良港タンジュン・ペラック港を中心に、オランダ植民地時代から貿易の中心として栄えた。現在はインドネシア最大の港湾で、最大の軍港である。

今回は、IACS 学会に参加する理由はいくつかある。まずは、2004年から始まった IACS 学会はアジアに関する研究のトップと言われる権威のある学会の1つなので、たくさんの研究者が来ていた。さらには、今回の学会には、自分の研究（ジェンダー及びクイア研究）と近い発表が多かったということ。

1日目から3日目はほとんど学会漬けだった。会議の場所はスラバヤ市におけるアイルランガ大学。3日目は自分の発表が終わった後、スラバヤ市街をちょっと観光してきた。バリ島やジャカルタなどの大都市と比べると、スラバヤは特に観光地ではない。あまり見る物も無く、車とバイクが多く、街歩きは疲れた。しかし、街行く人も優しく、料理も美味しかった。4日目は飛行機で名古屋に帰った。

簡単に費用をまとめると

- ・飛行機 名古屋とスラバヤ往復 11万円
- ・ホテル 3泊 1.3万円
- ・ピザ 25usd (約3000円)
- ・タクシー 5000円
- ・食事 4000円

台湾旅行記

岡 英里奈

日本文化学専門 博士後期課程4年

私は2015年11月13日から16日にかけて、台湾・新北市に滞在した。輔仁大学で開催される国際シンポジウム「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」・「次世代フォーラム」に参加するためである。

到着翌日の14日は招待講演も含めた研究者による「翻訳」をテーマとする多くの報告を拝聴した。帝国日本による植民地化や戦争の歴史は、たくさんの人々の移動をもたらし、時に権力関係を孕んだ、多言語的な状況を生み出した。そしてそこでは、日本語からハングルに、中国語から日本語にといった文字通りの翻訳作業とともに、より広い意味での、文化の接触や受容、または衝突といった現象があらゆる場面において起こっていた。報告のなかでは、そうした「翻訳」をめぐる数々の現象の跡を文学テキストの中から掘り起こし、言葉が移動すること、文化が移動すること、そして人々が移動することの意味を、多様なアプローチによって追求する刺激的な論が数多くあった。

シンポジウム2日目の15日は、大学院生を中心とした「次世代フォーラム」が開催され、私も「旅する作家、旅する言葉——脱「文明批評」的藤村論のために」というタイトルで報告を行った。その内容は、作家・島崎藤村が1936年に南米を訪問した際に、現地の日本人移民の子どもたちに贈られた「大和言葉の碑文」について考察したものである。作家が旅し、それについて記録したテキストに向き合うとき、多くの場合私たちはその作家個人の文学性に注目して読解を進めていく。だが、時として作家の旅にはその背後に強力な支援者がおり、作家が何を見て何を書くのかに大きな影響を与えることがある。藤村の南米訪問の場合、その支援者とは日本政府であり、そのため彼の旅とは、あらゆる政治的立場が拮抗する空間において遂行されたものであった。だから彼が現地で言葉を発したり届けたりする場合にも、その言葉はそうした立場の数だけ多様な意味をもつ。報告では、その様子を柿